ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

㉚ 菅原文太

がんとの〝仁義ある戦い〟

この連載で先日、高倉健さんを書きました。健さんの死から半月後、もう一人の銀幕スターが旅立たれたことも忘れてはなりません。菅原文太さん、2014年11月28日死去。81歳。

07年、文太さんは尿に血の塊を見つけて検査へ行くと、膀胱（ぼうこう）がんのステージ2と診断。全摘手術を勧められます。

膀胱がんの発見は、血尿がきっかけになります。放っておくのは命とりです。早期発見であれば、ほとんどの患者さんが完治可能です。ただし治療後に再発しやすいのも、このがんの特徴です。

文太さんは、膀胱全摘を拒否。交友があった鎌田實医師に、こんな相談をしています。

「膀胱を摘出して立ちションができなくなったら菅原文太じゃない。何か、いい方法ないかな？」

すごい台詞です。これ以上、菅原文太らしい言葉があるでしょうか。多くの医師は一蹴することでしょう。男らしさと命とどちらが大切か？　くだらない、と。

しかし私は、こういう選択もありだと思います。武士の一分とでも言うべき譲れない「何か」が、それぞれの人生にあるのです。

鎌田医師は多くの専門医に声をかけ、温存療法をしてくれる医師を文太さんに紹介しました。治療内容は、3カ月の入院で抗がん剤を3回投与、放射線を23回、陽子線を11回照射するというものでした。

文太さんの選択は間違っていませんでした。治療から5年後もがんの影は見当たらず、「俺は完治した！」と快哉を叫んだとか。その後、がん患者さんに向けて、セカンドオピニオンの大切さについて精力的に講演活動を行うようになりました。

しかし、肝臓に転移巣が見つかりました。奥様は、再発を本人に伝えなかったそうです。

現在、がん発覚を本人に告知することは当たり前となりました。ただ、再発の告知となるとどうでしょうか？　文太さんは、自ら勝ち得た完全復活を喜び、充実した日々を送っていました。そこに再発を告げることが、果たして良いことなのか？　年齢にもよりますが、大変難しいところでした。

再発から2年間、文太さんは最期まで生ききりました。奥様は次のようなコメントを発表しました。

「7年前に膀胱がんを発症して以来、以前とは違う学びの時間を持ち、〈朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり〉の心境で日々を過ごしてきたと察しております」

私、「がんは人生を二度生きられる」とよくお話をします。がんになったからこその出会いと気づきが、人生を豊かにするのです。

文太さんはまさに、その手本。がんとの〝仁義ある戦い〟方を私たちに見せてくれました。